・生徒のプライドの問題なのか、教員側から問いかけても、解決しようとしないという生徒の傾向がある。
・“試行錯誤する探究”を生徒に促しているが、綺麗にまとめようとする傾向がある。教師からより良い探究にするためのアドバイスをしても、班員が決めた流れを貫こうとする傾向は強い。
・“健康寿命をどう伸ばすか”という問いを出発点にした班が、最終的には“御影高校生の運動不足”という問いに変化していた。やはり、結論に導くには時間がかかると思う。
・暫定版結論のイメージとしては、“ここまではわかっているが、ここは調べられていない”という見せ方で問題はないように思った。
・問いの立て方が身近でないように感じた。それは、生徒たちは日々疑問が少ないので、大人が問題だと言っていることをそのまま取り入れているように感じた。もっと普段の授業で「なぜだと思う？」という発問を繰り返す必要がある。
・今までの探究Ｂ（一般クラス１年生対象・令和３年度まで開講）でしているときより、生徒たちが自分の力でできているように感じている。様々な教科で発表を経験していることが生かされている。15 時間探究をして中間発表を迎えている。今後第２サイクルに入っていくが、全体の実施時間を考慮すると、探究プロセスのサイクルが１つの方がよい可能性もある。
・“地域や世界の誰かの困りごとを解消したり、是正したりするためにできることはなにか”という大きいテーマを設定している。テーマをどのように設定するかは難しいが、子どもたちがやっていて楽しいと思えることをやってほしいと思っている。困りごとではなく、自分たちの好きなことを突き詰めるというやり方でも良いのではないかと考えることもある。好きなことで実施した探究学習の方が、生徒たちも熱が切れずに長期スパンでもできるかもしれない。

■今後の御影高校の探究の在り方について
・ゼミ形式にするかどうかという点は、学校の方針で決めるとよい。ある高校では、先生が最初に提示して好きなものを生徒が選ぶ。領域ごとで行う探究も良いし、現状のように困りごとについて探究をすることも問題意識を付けるという点でも学生にとって良い。後者は生徒にとっての教員の意図が狭く捉えられているかもしれない。
・グループで探究している場合、班員一人一人が自分事として捉えられていないような、関心の濃淡を感じる。もしかすると、身近な問いではあるが、自分事として捉えられていない可能性も考慮しなければならない。問いに対してのこだわりが、あまり持てていないように感じた。探究学習への熱量やこだわりを強く出すためには、個人探究でも良いかもしれないと感じた。自分だけの関心のあるテーマを立て、それについて調査と検討を行う方が良いのではないか。探究学習に関するテーマ設定をフリーテーマにすると、生徒の個人的趣味の探究になる可能性もある。しかし、地域探究型と個人的な趣味の探究型のどちらにせよメリット・デメリットがある。探究を通して、御影高校がどのような生徒を育てたいかということを明確にすべきだと思う。
・個人の志向が一番強いほうが良い。生徒が、探究学習に対して熱が入るようなテーマが良いと思う。地域の困りごとを調べる生徒がいても良い。ゼミと考えずに、広く生徒を見ることができる視点が必要なのでは無いかと思う。“なぜか？”という問いを生徒に対して投げかけ続けることが教員の仕事である。

第４回 カリキュラム開発会議

日　時：	令和６年２月８日　15:20～16:10
場　所：	兵庫県立御影高等学校　リサーチルーム
出席者：	若松委員、鎌田委員、森本校長、横山教頭、栗林主幹教諭、金澤主幹教諭 志方主幹教諭、大和教諭、土居教諭、井上教諭、橋本教諭、飯川教諭、大西教諭 林コーディネーター
内　容：	校長挨拶、報告、協議
報　告：	文理探究科予定カリキュラムにおける科目名の変更について
協議題：	・探究活動とデジタル機器、および、探究活動とデータサイエンスの関連性について ・クリティカルシンキングＡの授業内容について

協議内容

■探究活動とデジタル機器、および、探究活動とデータサイエンスの関連性について

・データサイエンス的な探究活動という点では、知り合いの後輩と教員が関わっている高校が参考になるかもしれない。その高校では、データサイエンス探究を主軸に捉えている探究活動もあり、実際に訪問した際には、ゲーミングPCを自分たちで初めから創作する活動なども行っていた。また、デジタルネイティブだからといって必ずしもPCやプログラミングを得意としている世代ではないということについては探究活動の内容を決める際に、留意すべき。

・我々はデータサイエンスを得意としているわけではない。自身の周囲でデータサイエンスに興味関心が強い人やデータサイエンスに関連する仕事に就いている人を紹介すること程度であれば可能かと思う。また、ある高校では、情報の時間を探究活動に取り入れ、実施している。御影高校も探究活動の授業と情報の授業を組み合わせても良いか。

・情報の授業と探究活動の授業を組み合わせるような形態をとっている学校は、大きなゴールイメージを、探究を軸に描きつつ、それに対して情報の授業をどのように位置付けるかについてよく考えられていると感じる。さきほどの高校は、対話型論証モデルなども利用しており、探究の論証過程を経ることで、育てたい生徒像は変えることなく取り組みを実践できるかと思う。

・今年度実施した探究活動のアンケートを実施し、アンケート結果を見て、現状の結果を来年度に向けてさらに良くするという点では良いと思う。

・小学校の事例になるが、「読解科」という独自科目を設定している小学校もある。読解科では、小学校版のクリティカルシンキング的な内容の授業回もあれば、小学校版のデータサイエンス的内容の授業回もあった。

・現時点では、デジタル機器やデータサイエンスをどのように探究に結び付けるかという構想はいまだ至っていない。来年度、早急に考えて実施する必要があるとは感じている。

■クリティカルシンキングＡの授業内容についての感想

・クリティカルシンキングの授業内で、情報の取り出しが読むことだと伝えていた。しかし、一定、言われていることが腑に落ちていない生徒もいるのだと思う。生徒の中には、文章の後ろに筆者という人が存在するというよりも、神が書いた聖典のように間違いは存在しないという感覚に陥っている生徒もいるのではないかと感じる。一度、生徒自身で文章を書くことで、文章の後ろに神ではなく、筆者という人がいることに気がついてくれる可能性はあるのではないかと考えており、それがクリティカルシンキングにつながるのではないかと思う。

・読書レポートについてだが、今年度クリティカルシンキングに関わる中で、非常に良い取り組みだと思った。ただ１つ感じたことは、読書レポートの読書ジャンルが自由設定なことが、講師にとっては少し難しかった。読書レポートを何か授業に活用するのであれば、回ごとにジャンルを指定する方が良いと思う。
・読書レポートの課題は、小学校や中学校だと先のない軽い感想文になりがちだが、自分の問いと自分がどのように考えるかといった一段階深い思考が求められるので良いと思った。また、副教材にも文章を記述して解答する問題はあるが、論述的ではないということなので、論述に寄せたものがあればさらに良いと思う。
・副教材を用いた授業もしているが、記述問題は長くても 100 文字程度の記述でしかない。もう少し長い記述問題にも当たらせる必要性も感じている。また、来年度は、もう少し理系にも寄り添えるような授業設計を行いたいと思っている。今年度も実施した、学術論文にどのようにアクセスするかという話に関しては、もう少し早い時期に生徒に対して周知するべきかと思う。
・論文にも種類があるので、様々なアプローチの論文を読むことで、数字だけを見て慌てるようにならないような機会を設けても良いかと思う。
・生徒達がこの１年の経験をどのように感じているのかを簡単にアンケートしても良いかと思う。クリティカルシンキングをどう捉えているかについて再度確認し、授業アンケートも実施しても良いと思う。

第５回 カリキュラム開発会議

日　時：	令和６年３月 19 日　12:00～12:30
場　所：	神戸サンボ―ホール
出席者：	鎌田委員、土居教諭、井上教諭、橋本教諭、飯川教諭、大西教諭 林コーディネーター、竹中コーディネーター
内　容：	協議【御影セッション（探究成果発表会）を受けて】
協議題：	・発表会を見た感想、および、次年度取組むべき内容について

協議内容
・普通科においては、アンケート調査やインタビュー調査を手法とした探究が多いことが御影の特徴だと感じた。
・社会科学的な調査だけでなく科学的実験による探究もあったが、アプローチを問わず全体として実験デザインや考察の妥当性に課題があると思われる。
・文理探究科では、テーマの多様化に加えて、アプローチの多様化という側面での学際化を期待する。
・前回見学させていただいた時と比べると、１年生でもクリティカルな質問をしている生徒もいるように感じた。しかし全体としては時間の制約もあり質疑や議論が少なかった印象がある。
・生徒の探究の目指す姿だけでなく、どのような質疑応答の姿を目指すのかも学校として見通しを立てても良いかと思った。
・新教科のクリティカルシンキングで身につける力は、自己の探究のみならず、他者の探究と対話し深めることにもつながると思うので、今後の生徒の成長に期待したい。

第１回 コンソーシアム会議

日　時：	令和５年６月30日（木）13:20-15:10
場　所：	兵庫県立御影高等学校　リサーチルーム
出席者：	菊地委員、伊藤委員、石田委員、吉川委員、藤田委員、飛田委員、尾花委員、山田主事、森本校長、横山教頭、橋本教諭、飯川教諭、大西教諭 竹中コーディネーター、東コーディネーター、林コーディネーター
内　容：	校長挨拶、管理機関挨拶、自己紹介、資料説明（本事業説明）、協議
協議題：	①昨年度に各団体・機関から実施していただいて事業の成果と課題 ②新学科での取組に向けての協議－各団体・機関が実施可能と思われる事業 ③新学科設置に向けての要望・意見

協議内容

■昨年度に各団体・機関から実施していただいて事業の成果と課題

菊地委員

数年間、神戸大学の学生が、大学の教職科目授業の一環として御影高等学校の授業に訪問し、探究活動を支援している。この授業を行うことで、学生の教育実習以前に、生徒の学びを体験し、生徒達と接することができる。神戸大学と御影高校の連携は、御影高校にとって意味のある連携かと思われるが、神戸大学にとっても意味のある連携だと考えている。そのため、来年度以降も同形式で進行し、関わっていきたい。

谷口委員

課題研究の授業に参加し、生徒の研究について聞き取りや助言を行い、結果の共有もしていただいている。学校の授業時間の枠を超えて、生徒が主体的に探究活動を行っていると感じる節がある。

伊藤委員

理系的な特徴が強調されるのは、令和６年度に向けての話だったが、それ以前の取り組みはどのようなものか聞きたい。

→新学科の生徒は、２年生の２学期の９月から、２学期と３学期にかけて理系に興味が強い生徒がそこから探究活動を開始し、実験などを実施する予定。現在の１年生の総合人文コースは、文理両方の希望生徒がいるため、来年度の２年生から探究を深めていくプロセスで実験等を行う予定。

石田委員

御影高校の活動成果として、企画展を博物館で数か月開催されていた。規模感が大きく、展示も充実していて、良い成果だと感じた。また、一般来場者の評判も良く、御影高校の生徒に対する良い評判も耳にする場面があった。

吉川委員

当NPOから御影高等学校へ講師として派遣している椎木さんから、「主体性がある生徒達」と報告を受けている。我々も、主体性の高い御影高等学校の生徒の関心をどう高め、視野をどう広げるかを日頃から考えている。例えば、探究活動内でSDGsや国際問題のテーマと決めてしまうと、一方的な考え方になる可能性がある。その為、多面的に物事を捉える力や解釈を提供したい。

藤田委員

御影高校の語学研修のコーディネートをしている。JTB としてホテルの手配・安全の確保といっ

た今までご提供していたことに加えて、御影高等学校を新たな連携先と繋ぐ・拡げるような力添えがしたいと考えている。現在取り組んでいる事例としては、神戸市内の産業と教育をつなぐ SDGs プログラムを現在行っている。地域探究ではないが、産業と教育とのかかわりの拡大への協力は可能かと思われる。

飛田委員
　昨年度は、授業に参加していなかったので、それ以前のことについて。我々は、NPO を支援する NPO として活動している。NPO 団体は、地域住民と同レベルの問題意識を共有しながら地域課題の解決を目的とする団体が多いが、生活課題は文理やセクターに分類されていない。スーパーのレジがセルフレジ化したことについての高齢者の悩み事や、ハンディキャップを持つ方への支援、病児保育の問題等がある。現在それを調査し、社会課題が 150 程度集まっている。我々は、高校生が地域の課題に介入できるのではないかと考えている。

尾花委員
　クリエイション講座を 2 日間、昨年担当した。振り返りとしては、せっかく事例見学に行くならとインプットが多くなってしまったことが挙げられる。講師側からの話になるが、手探りだったことから、事例調査後のヒアリングや話の的を射ることが難しく感じた。「卒業生」として話をすると言うと、距離感を近く感じてくれているような感覚があった。

■グローカルコンシャスデイについて Q&A や要望
東コーディネーター
　クリエイション講座も同様だが、連携先へのオファーが曖昧に感じる。事業のどういった分野の学びで、生徒にどのような気づきを与えるかといった講座の意図を連携先に示すべきでは無いかと思う。

菊地委員
　講座の意図や目的は、講師として依頼する際に伝えていただいた方が良い。博物館のワークショップであれば、楽しんでもらい次の来館に繋ぐことができればいい。しかし、高校生の場合は楽しませるだけではなく、講座やワークショップを通じての学びや気づきが必要である。それは、御影高等学校から連携先にメッセージとして提示するような設計に変更したほうが良い。
→講座実施の際は、担当いただく講師の方と当校で協議を行いたいと考えている。
→テーマを絞ることで、限定を強めるのではないかと考えている。生徒たちの学びへの関与も各団体で決めた方が良いかと考えていた。様々な講座開設ができるかと思われるので、委員の皆様には協力をお願いしたい。
→グローカルコンシャスデイについても、20 講座の内容を東と橋本先生で順に詰めることでグラデーションのある講座展開が必要になると考えている。

吉川委員
　学年全体で学びの機会があることは素晴らしい。色々な学校が企業にあたって、担当される先生に知見は蓄積されるが、引き継ぎが難しい。どのようなことが生徒の学びになるかについて、みんなでどう積み上げていくのかを議論したい。現在、私たちは気候変動や国際問題を担当させてもらえれば良いかと考えている。せっかくの少人数の講座なので、ネットで検索しても出てこないような話やリアルな話を提供したい。

藤田委員
　やはり、全体の講座開設の目的と 20 のテーマを先に御影高等学校から設定してもらいたい。それらを決定いただくことで、そこに当てはまるような講座を探して提供できる。また、他企業との兼ね合いの調整もしやすいかと考えている。全体を捉えた目的とテーマとを構築して欲しい。
→またどういう形式で依頼するかは相談したい。

飛田委員
　グローカルコンシャスデイの内容の検討になるが、PPT づくりは生徒のアイデアをどこまでまとめる予定なのか。講師は、どこに向かって 10:35 迄講義すれば良いのか。聞いたことをただまとめるだけでは探究活動にはつながらないかと思われるので、解像度をお示しいただきたい。
→それらは、テーマをそれぞれ設定した際に、よく見えてくるかと思う。言語表現スキルの向上を目的としているので、聞いたことをまとめるだけでも良いと考えている。探究力の向上は、元来の設計に関わっていなかったため、設計から少し考えなければならない。

石田委員
　現在の講座設計だと短時間に盛り込みすぎて、効果が出にくい可能性がある。質疑応答などは、どこに組み込まれるのか。
→講座の最低達成してほしい条件は、150 分の講義・ワークショップ・共有物の作成なので、質疑応答が必須ということではなく、講師の方の采配にお任せしたい。

石田委員
　時間確保の為に、別日に生徒達が資料をまとめるのが良いのではないかと考える。

藤田委員
　生徒達に宿題を出すのはどうか。
→現在は宿題形式で何か成果物を提出してもらうことは考えていない。また、校内で議論する。

菊地委員
　生徒たちにとって、振り返りの時間は重要かと思われる。他の生徒が発表した内容を聞いてどう感じたかについて考える時間も取った方がいい。珍しいことを聞いて楽しむだけではもったいないので、時間配分は見直された方が良い。1 日で講座を簡潔する方針であれば、午後を利用することの検討も必要になる。100 分話し続けることは大学生でも聴くことが難しいため、高校生は特に難しいと考えられる。聞いたことをまとめた上で、提案を行うなどの＋αを提示する、もしくは、それを連携先側に伝えるのが良いと思う。

橋本教諭
　講義・ワークショップにどの程度の時間が必要か。
→コンシャスデイの目的といったゴールをどこに決めるかによると思われる。
→講座の事前資料の共有等を宿題で調節を行ったら良いのではないか。

尾花委員
　オンラインでも良いので、講座開始前に受講希望者と簡単に話したい。

→事前アンケートは実施する。今の話からであれば、3 コマ＋別日に共有を行うイメージで構築する方向で進めようと思う。
→PPT 作りと決めてしまっているが、成果物については柔軟性を持たせたい。

菊地委員
　生徒にどういう学びを提供するかを先に決めなければ、時間を増やしても意味がないかと思われる。
→校内で、日程と全体の進め方を再検討する。

■新学科設置に向けての要望
伊藤委員
　次回、御影高校として文理融合の探究へ移行することで、理系の学びについてはどのように検討しているか改めてお聞かせいただきたい。

山田主事
　県からの支援には限りがある為、低予算でも持続可能な連携についてのご意見を伺いたい。
→企業は、子どもの力の為になりたいと考えているところが多い。外部講師を招いての講座は手間や時間もかかるので、通常であれば 1 日 10 万円がかかるような内容かと思う。しかし、高校の場合は、講座後の別日の振り返りをしっかり行うことで、企業の努力も報われるかと思う。さらに、教育ファンドを地域住人に立ち上げ、特別授業の支援を募る方法もある。また、教員は部活・自分の授業・用事など多忙であることから、教員との打ち合わせの時間調整が難しい。正直な希望としては、連絡調整等に特化した教員を置いて欲しい。

第２回 コンソーシアム会議

日　時：	令和 5 年 11 月 24 日（金）14:00-16:00
場　所：	兵庫県立御影高等学校　リサーチルーム
出席者：	菊地委員、伊藤委員、石田委員、谷口委員、吉川委員、藤田委員、飛田委員、尾花委員、山田主事、森本校長、横山教頭、橋本教諭、飯川教諭、大西教諭 竹中コーディネーター、東コーディネーター、林コーディネーター
内　容：	校長挨拶、管理機関挨拶、出席者紹介、資料説明（本事業説明）、協議
協議題：	①普通科改革支援事業のロードマップ ②グローカルコンシャスデイ　12 月 15 日(金）の実施について

協議内容
■普通科改革支援事業のロードマップ
菊地委員
　神戸大学文学部代表として来校しているが、2 年生 1 学期に CrossⅡ（現状 GSⅡ）で協力させていただいている。大学生にとっても大学の授業の一環として、教育実習前に生徒と関わる機会があるということはありがたいので、今後も続けていきたいと思う。地域探究プロジェクトというと学生の専門とずれてしまうことがあるようだが､実態の中では若干コンセプトのずれは生じているが、新しい学科の中でどのように擦り合わせるかについてまた話をしながら進行したいと思う。神戸大の他の教員にも、今日ご説明いただいたコンセプトなどは共有させていただく。テーマリサーチの CrossⅠなどでやっている内容について、うまい具合に進んでいるという話だったが、神戸市の竹の

話は今年度の夏頃に突然飛び込んできて実施されたと聞いている。結果として、良い活動になったと思うが、神戸市との連携を今後も上手く繋げることができたら面白くなってくると思う。しかし、積み上げてしっかり準備した状態の物を実施された方が良いかとも思う。

吉川委員

当初は、探究学習とは何かというところから出発し、形なきものをちょっとずつやっていこうという感じがしていたが、今日の橋本先生からの案内を聞いた限り、形なかったものが段々と形あるものとして具現化できていると感じた。御影高校の改革事業については、限りなく順調に進行していると思う。そういった点が希望者数にも影響しているのかと思う。今後どうするかについては、探究学習の受け手の生徒と提供側が対等かどうかという点が重要になっていると思う。今後は、大人も一緒に探究活動をしていくことが重要なのではないかと思う。大人は、“問い”に重きを置きすぎて、重心を後ろに置きながら生徒を操作してしまっている感覚を生徒は敏感に読み取ってしまうので、学習の提供側が前のめりな感覚が増すと良いのではないかと思う。そういった点で、神戸市と共同で実施された竹の活用に関する探究学習は、良い結果だった。我々は現在ネパールのコーヒーを活用した探究学習のプロジェクトを御影高校の 1 年生に実施しているが、別にネパールのコーヒーを別に好きになって欲しくて実施しているということではない。経済や農業といった学習の要素を生徒に知って欲しいと思い、また、学習の提供側からも、学習の要素などを普段の各教科の授業などで強調することでより良い学びへと発展していくのではないかと思う。

谷口委員

高校生にとって、社会に出ていく上で重要になる学習が実現できているのだろうと感じた。御影高校の現在の取り組みは、本当に素晴らしいと思う。

飛田委員

50 期生の卒業生であるが、自分が在学中にこのような授業を受けたかったと思う。探究学習などを実施することで、知識や経験が積めるのは素晴らしいと思う。ただ、探究学習などでワークショップ形式の授業自体に生徒達が慣れてしまうことで、予定調和的な感覚が発生してしまうといったことが頻繁に起こるようになってきていると思う。授業の中で突発的なことがあると、生徒たちの新たな学習に繋がっていくのではないかと思うので、この予定調和を抜け出すための余白の部分を、どのように設計するかが重要になるかと思う。第 3 のチューターを地域の方に協力いただき、部分的に入っていただくことで予定調和から外れるような余白を作成することもできるのではないか。

藤田委員

JTB では、企業として学びの機会のプログラム開発をしており、課題に対して企業や NPO や行政を繋げるような活動をしている。高校生がテーマを自ら設定することの難しさということに対しては、探究の中で何を学ぶのかということが関連していると思う。探究学習では、探究を続ける中で生徒が自信を獲得することで課題を見つけた際に自分事として取り組むことができるようになることが重要な成果になるかと思う。現在、JTB は企業の困りごとなどの課題を一緒に解決するというプログラムの開発を行っている。また最近は、自らでテーマを設定することを中学生、高校生に求めることは、求めることが過大すぎるのではないかと思う様になった。ライフワークにしようと思えるタイミングは、人それぞれなので、探究を通したきっかけで考え方や人とのかかわり方ということを大切にする過程になったらよいとは思う。

■グローカルコンシャスデイ 12 月 15 日（金）の実施について

飛田委員

グローカルコンシャスデイの講師側のジェンダーバランスに偏りがあるので、来年度の実施の際は、ジェンダーバランスも含めて考えていただきたい。このご時世に参加講師の中に女性の割合が 1 割以下というのは、あまり宜しくないと思う。

山田委員

各講義の趣旨とどのように評価するのかについてご教示いただきたい。

橋本教諭

特別活動として実施するため、評価は行わない予定である。しかし、生徒達がどのように感じたのかということについては、講師側へプリント等を利用してフィードバックを行いたいと思う。

山田委員

評価については、三菱リサーチ＆コンサルティング株式会社から評価や質問項目の研修もされたということで伺っている。普通科改革支援事業の中で実施したプログラムがどのプログラムが成功だったのか、また、どのような成功だったのかということについて学校内で評価を行うことで、来年度以降も継続していくかどうかについてや、今後の改革についての指標、今後の方向性の検討も含めて評価されるのが良いと思う。また、評価された内容はコンソーシアム内で共有することで、今後の方針をコンソーシアムメンバーと検討することも可能になっていくのではないかと思う。また、プログラム設計については、橋本教諭は、生徒たちが熱量を持って話をすることが重要だと言及していたが、講師陣はプログラムの重要な点である生徒達が熱量を持って話をしているところを受け止める時間が無いという点をもう少し検討されるべきではないかと思う。このプログラムの主眼ともいうべき、生徒がどのように捉えているかを語り合う様子は、講師の皆様方とも共有することが必要なのではないかと思う。前回の会議では、先進的な知見に触れることが重要だということで構想していた中で、御影高校が来年度以降にどのような方針でグローカルコンシャスデイを運営していくのかという方向性について検討が必要だという話が出ていましたので、その話に関する回答を伺いたい所存である。

谷口委員

グローカルコンシャスデイについて概要などをまとめた依頼文を作成していただき、目で見て確認できるものがあれば欲しい。

菊地委員

グローカルコンシャスデイのどういう目的で何をやるのかということは、今日の話を伺う中で理解するところが多かったような気がする。御影高校側の意向としては、講義内容をきっかけとして生徒達の新たな知見に繋がるような学びにしたいという認識だと思う。こういった内容をまとめて言語化しておけると、新しい知見やきっかけを生徒に与えることができたかなというふりかえりを講師自身が行うことができると思うので、作成していただきたい。

石田委員

探究学習につなげていくには、生徒達に考えさせるフェーズも必要になってくるかと思う。

第３回 コンソーシアム会議

日　時：	令和５年 12 月 15 日（金）11:00-12:00
場　所：	兵庫県立御影高等学校　リサーチルーム
出席者：	菊地委員、石田委員、谷口委員、藤田委員、飛田委員、尾花委員、柳本委員、 櫻井委員、高垣委員、細川委員、鎌田委員 森本校長、橋本教諭、飯川教諭、大西教諭 竹中コーディネーター、東コーディネーター、林コーディネーター
内　容：	校長挨拶、協議
協議題：	グローカルコンシャスデイの振り返り

協議要旨

石田委員

今回のグローカルコンシャスデイでは、生物多様性を確保する為の講義を実施した。生徒たちには、受講した生物多様性に関する講義を整理し、発表や討論をする設計を行なった。今回は短時間の実施であったにも関わらず、生徒は活発に討論の上、まとめ上げて発表することができていたので、感心した。運営側に対しての課題も特に感じるところは無い。講義時間は、少し短いと感じたこともあり、講義に少し焦りがあった気がする。次回開催の際には、もう少し講義の実施時間が長いと良いかもしれない。個人的に実施時期は、年末の 12 月は仕事の都合上、多忙となりがちのため、12 月の実施ではない方が好ましい。但し、グローカルコンシャスデイに参加される協力者の皆様は、お立場が様々で忙しい時期が違うので、そのあたりは今回の実施時期が妥当かと思う。

高垣委員

今回は、献血の経験がない御影高校生に対して、セミナーを実施した。講義形式のセミナーはこれまでに経験があったが、ワークショップの形式のセミナーは初めての試みだった。現在の教育環境や現代の高校生を知らずに参加したため、今回のグローカルコンシャスデイの参加で得られた経験を次回以降の参考にしたい。運営側にはその辺りもフォローいただきたい。

鎌田委員

今回は、哲学的人文学的な探究への招待というテーマについて講義を実施した。基本的な探究学習についてお話をした。ワークショップは時間が足らずとなり、実施はできなかった。このグローカルコンシャスデイという企画のグローカルコンシャスが生徒にどの程度共有されていたのか、という点が疑問である。生徒には、この企画をどのように宣伝されていたのかという点が知りたい。

菊地委員

グローカルコンシャスデイの位置づけについては、今後検討していただければと思う。今回の企画で集まっているメンバーは、企業等で活躍されている方なので、社会で活躍されている方々の日頃の活動などが、どのように展開しているのかについての生の言葉などを高校生が吸収できる貴重な機会になると思う。従来、学校だと知識を学ぶという比重が大きいと思うが、この企画を通じて知識の蓄積が社会でどう生きるかというヒントの１つとして高校生たちに届くと良いと思う。また、企画実施の際に講師の持参するテーマや講義内容なども、どんどんと更新していきたい。先刻、橋本先生よりほとんどの生徒が第１希望を出した講義を受講したと伺ったが、講座間に人数にバラつ

きがあるように感じている。多すぎると密接に関わるようなワークショップの実施は難しいので、そう言った場合はサポート役の教員の方がいれば声掛けや支援ができて良いかと思う。

櫻井委員
　講義の前半は吉川がオンラインによる講義形式で話をし、後半は私からワークショップ形式の講義を行った。私が高校生の時には、出前授業はあったが、今回の企画のようなインタラクティブな授業を実施した経験がなく、事前に講義やワークショップで生徒がどのようなことに興味があり、どのようなことが聞きたいのかについて事前に明らかになっていれば、講義やワークショップの構想が組みやすいといったことはあるかと思う。

藤田委員
　高校生が、何に興味を持って受講を希望しているのだろうかと思った。何を考えて欲しいという企業側の思いと何に興味を持っているかという生徒の思いが半分半分で構成されている授業構想になると良いかと思う。今回の企画で実施した授業について講義内容など、ギリギリまで考えたので、よりやりやすい運営や形式が作れたらよいかと思う。

飛田委員
　今回の企画は、楽しく実施させていただき有意義な時間になった。運営に対して思う点に関連して、御影高校に他の授業でも訪問させていただくことがあるが、その際にも思うことがある。講師の方々の中にも、このような授業に慣れている方、慣れていない方がいるので、教員の方からフィードバックがもっと欲しい。教員の方々が何を思っているのかについても気になる。あと一点ですが、これは前にもお伝えした通り、次回以降の開催時には、ジェンダーバランスにもう少しご配慮いただきたい。

谷口委員
　今回の企画の核である、グローバルについては講義を行うことが難しかったため、私は、地域活性化のローカルに焦点を当てて、グループワークの比重が大きい授業形態で実施した。教師の方々が、通常の普通科とは違う講義をして欲しいという思いがあるのであれば、この企画の目的がもう少し明らかになっているかと良いと思う。また、皆様仰っている通り、生徒は何が理由でこの講義を選択したのかについては、明らかにしておいた方が良いと思う。また、感想等いただける場合は、手描きだと文字が潰れてしまっていることから読めない字も出てくるので、スプレッドシートなどのデジタル媒体でいただきたい。デジタル媒体での回収であれば、教師の方々の回収作業なども楽になる上に、見やすいかと思う。

尾花委員
　まずは、運営側が今回の企画を実施されたことが非常に素晴らしいと思う。また、事前情報がもう少しあれば、講義内容をより磨き上げることできるかと思う。いつも関わりのない教師の方々と今回の企画を通じて関われたというところが良かった。ワークショップ内で生徒と教師と双方とふれあうことができたので良かった。

東コーディネーター
　今回は、主に編集を学ぶというテーマでグローバルにもローカルにも焦点を当てて実施できた。

講座の途中で、全然知らない人たちが入ってこられて講義が途中で中断されてしまったので、やめてほしいなと思った。図書室を利用しましたが、モニターが小さく、資料が見にくいなと感じたので、大きいモニターをご用意していただきたい。講座時間は、2時間では足りないなと感じたので、個人的には2時間半の実施時間が欲しい。講義1時間とワークショップ1時間で設定していたとしても、生徒属性を知りたいので最初の 15 分は生徒の自己紹介などに使ってしまうことと、最後の15分は振り返りがあると良いなと感じているので2時間半が良いかと思った。

細川委員

何を理由にデザインの講座を選んだのかという生徒の個人的な思いというところは、事前に知りたいなと思う。それを知ることで、講座人数的に全員を見ることが難しい場合も、デザイナーになりたい生徒を重視すること等も可能になる。

柳本委員

非常に良かったと思っている。私の場合は、1 時間話した後、質疑応答などを行った。講座構想が、高校生にとって少し難しいかなと思いながら講義に挑んだが、御影高校生が素晴らしかった。私は、質疑応答をすることで理解を深めることができると感じている。社内でも質疑応答をすることで理解を深めるということは実施しているので、今回の講義でも御影高校生に実施した。質疑応答の時間的に全員の方と質疑応答のやり取りをすることは難しく、講座を受講してくださった6割程度の生徒と質疑応答のやり取りをした。講座時間については、2時間でちょうど良いぐらいだったという感覚がある。

橋本教諭

実施時期については、講座と振り返りを半日で行う構想ということだったので、2年生全体を一斉に半日授業するということで、本年実施したこの時期が現実的かと思う。また、今回講師の皆様方が用意くださったワークショップに前向きに取り組めているというところは、2年生の12月という時期も作用しているように思う。たとえば、入学したての1年生では、同様の成果は得られなかったと考えている。入学後、今日までしっかり成長した証拠でもあると考えている。校内の教員との事前連絡や共有のあり方については、今回講師の皆様からいただいたご意見を胸に留めて実施していきたい。講師の皆様と直接事前にお話しできる機会を設けるべきだったと思う。生徒についてもある程度講座情報を与えながら希望をうかがい、生徒からも事前情報も吸収して、情報を相互に提供するべきだと思う。生徒の受講講座を決定するのが2週間程度早ければ、事前情報の吸い上げと共有も行えるかと思う。共有を行うことで、より深い学びの機会を提供することができるのではないかと思う。教室設備の不具合等ありご不便をおかけした点もあったが、教員も日々どのように授業をするべきかと模索している。今後も発展していければと思う。今回の企画については、ワークシートを用意した。生徒は現在ワークシートを作成している。作成したワークシートをもとに振り返りを実施するので、この後時間のある講師の方々は様子を見ていただきたい。生徒たちはワークシートの他に、レポートも作成する予定なので、手書きの文書となり恐縮ですが、後日講師の方に共有する。生徒への企画の意識づけについては、講座当日の朝に各教室へ ZOOM 等を利用して、私もしくは校長から目的について再認識させるような一斉連絡を実施した方が良いと思った。

②クリエイション講座

■実施にあたって

「新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）」の採択校に選定されたことを受けて、次年度より学科１年生を対象に開講する科目「CreationⅠ」（校外中心の探究活動を支える科目を先行実施するため、令和４年度の先行実施を踏まえて、令和５年度もモデル講座として地域の企業や事業者等と連携し、通常授業の時間外に特別講座を設けて地域探究学習の検証材料とした。CreationⅠの「選択STEAM講座」を念頭に置き、今年度の夏休み期間に先行実施。講座の企画運営にあたっては、どの講座も文系的な学び・理系的な学びの両方を体感できる「文理融合」を意識した講座とした。

■クリエイション講座の実施プロセス

１　連携先候補の選定

担当教員の希望をもとにコーディネーターが神戸市内の企業を選定し、一覧表を作成した。一覧表をもとに、担当教員とコーディネーター間で、交渉の優先順位を決定した。選定におけるカテゴリーを「A:経営」「B:里山」「C:地域とテクノロジー」「D:地震と防災」「E:生物多様性」「F:建築」の６つとした。

※選定にあたっては、STEAMの各カテゴリーのバランスに加え、ナショナルブランドからベンチャー、個人事業主、老舗企業のバランスも考慮し、講師陣の多様性やキャリアモデルも提示できるよう選定した。

※令和４年度に講師依頼をした方の中で継続依頼する方を選定し、積み重ねによるカリキュラムの質の向上をめざした。

※同一講師で３日間の講座と、３日間とも異なる講師で３日間の講座を設け、前者では「連続した学びの深まり」を意識。後者では「3講師の視点やアプローチの違い」に着目して比較学習できる相乗効果を意識した。

２　コーディネーターによる連携交渉

適宜、担当教員と一緒に連携先に訪問したり、コーディネーター単独で交渉したりした。

３　連携先との講座プランシートの共有

実施日等を含め、連携先の承諾が得られたら、依頼書を作成し、連絡した。その際、全体の事業設計における本講座の位置づけを説明するとともに、プランシートを講師に渡し、大まかな基本設計を依頼した。

その後は、講座プランシートをもとに、内容の目的を共有し、タイムスケジュールや準備物等実施に際する注意点等を把握し、担当教員と共有した。

４　講座プランについて、連携先と高校担当教員との調整

オンラインミーティングを活用し、教員、講師、コーディネーターの３者で事前打ち合わせを実施した。内容の微調整や、教員からのリクエストの反映、講座の目的について３者の共通認識の醸成を図った。

５　受講生徒の募集

講座内容が決定次第、コーディネーターが作成した告知チラシを約１ヶ月前に配付した。なお、

総合人文コース１年生は全員参加することとし、定員の空きがある講座については、１年・２年の全クラスから募ることとした。

６　講座の実施・引率

７月末から８月末にかけて実施した。引率は特色教育推進部の教員を中心に１名以上が引率した。加えて、東・竹中・林のコーディネーターのうちいずれか１名以上が引率した。

７　受講生徒へのアンケート・検証

アンケートについては、高校担当教員が実施した。

また、令和５年度から各講師との個別のふり返りミーティングを教員、講師、コーディネーターの３者で行い、来年度実施への参考意見やカリキュラムデザインの見直しのアドバイスを頂いた。実施は主にオンラインミーティングを活用した。

■クリエイション講座の実施概要

【Aコース　経営】 参加者　７名

●学びのポイント

①スタートアップ企業のインテリジェンス経営　②グローバル企業の国際経営、③地元地域に根ざした企業のサステナブル経営、この3社3様の経営スタイルを企業訪問とワークショップを通じて学ぶ。「経営」と言っても多様なコンセプトがあり、ビジョンやミッションも異なる、現代の企業の必要なビジネスマインドに触れることを意図した。

●3日間の連携

DAY１（8月9日）（講師：株式会社オシンテック　代表　小田正人他1名）

東灘区御影のフルリモート勤務のスタートアップ企業に、新しい会社像を学ぶとともに、ビジネスやキャリアにおけるゲームチェンジの考え方や、情報に基づくインテリジェンス経営のフレームを学んだ。AIの活用や環境問題等の現代の企業が直面する課題感にも触れた。

DAY２（8月10日）（講師：ネスレ日本株式会社）

神戸に本社を置くグローバルメーカーのビジョン、ミッション、マーケットのトレンドSDGsを意識した経営などについて本社を訪問して学んだ。

DAY３（8月23日）（講師：株式会社萩原珈琲　萩原英治代表他焙煎師2名）

神戸市灘区の老舗珈琲焙煎メーカーの港島焙煎工場を視察。日本で初めて炭火焼き焙煎の手法を確立した技術を知るとともに、地域密着型経営と大学で生物学を学んだ社長からの生物学的経営を形式で学んだ。

●生徒の感想（抜粋）

・フレームワークについての学びが、日常生活で何か計画を立てるときに活かせそう。
・今までとは違った経営の仕方、働き方の工夫を知りました。
・物事を多面的にとらえる力が養えた。
・学校内での話し合いや、普段の生活で周りを見ながら行動するということに繋げられると思います。

・目的や課題を解決するには４つの段階を踏むべきだという学びが、大学や社会で何かなんや時に幅広くいかせそうです。
・一見 相反しているものが回り回ってお互いの利益になるように工夫するという学びは高校での物事を決めたりする場面において活かせると感じた。

【Bコース　里山】参加者　１２名

●学びのポイント

身近な山である六甲山の森林の現状や活用の事例を学ぶ。また、木材がどのように加工され流通しているのか現場見学を通じて学び取る。国内木材の価格が安く林業が成立しない市場の現状でもユニークな視点で地場の木材を活用してビジネスを成立させるとともに、環境教育環境保全にも取り組んできるコーディネーターの仕事に触れる。

●3日間の連携　（講師：SHERE WOODS 山崎正夫）

DAY１（8月7日）

御影高校で座学にて六甲山の森林、木材の課題感や歴史、環境的役割を学んだ

DAY２（8月21日）

神戸市北区の里山開拓地である「imayama」へバスで訪問。神戸大学と連携して植生調査を続けている現場を視察。実際に森に入り調査を体験した。

DAY３（8月28日）

北区谷上の製材倉庫を視察し、丸太がどのように製材され木材として流通しているのかを学ぶ。また製材体験やグリーンウッドワークについてワークショップを実施した。

●生徒の感想（抜粋）

・今回のクリエイションで身につけられた主に、主体性、忍耐力、コミュニケーション能力などが得られた学びだと思いました。
・高校生活はもちろんこれからの大学生活、大人になり社会にでても活かせそうだと思いました。
・仲間と協力して問題を解決していく学びが、社会にでていく上で活かせそうだなと思いました。
・山や木についての知識が、これからの山の環境について考えることの役に立つと感じた。

【Cコース　地域とTech】参加者　５名

●学びのポイント

自治体ＤＸのマッチングを事業とするアーバンイノベーションジャパンを講師に迎え、地場産業である酒蔵の酒心館株式会社の経営課題をリサーチし、その課題解決手法をロジカルシンキングを通じて考える。またプロトタイプ制作を通じて、プレゼンテーションを学ぶ。テーマは「日本の食・日本酒産業やカーボンゼロの経済について、ありたい未来をつくるアイデアとテクノロジーを考えよう」。

●3日間の連携　（講師：一般社団法人アーバンイノベーションジャパン　吉永隆之、砂川洋輝）

DAY１（8月25日）（協力：株式会社酒心館）

東灘区の地場産業である日本酒の抱える社会課題を視察、副社長のレクチャーを通じてリサーチした。また事前課題として出していたアンケート調査のデータを分析し、アイデ